

Title	琉球方言学科目の教育目標をさぐる - 教養として方言をおしえることの意義 -
Author(s)	津波古, 敏子
Citation	沖縄大学紀要 = OKINAWA DAIGAKU KIYO(17): 93-101
Issue Date	2000-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/5862
Rights	沖縄大学教養部

琉球方言学科目の教育目標をさぐる

——教養として方言をおしえることの意義——

津波古 敏 子

1. わかい世代の言語状況

琉球列島で人々が日常生活にもちていることばは、はなしことば・かきことばとして日本全国でもちいられている標準語とこの島々だけで通ずる方言とにわけることができる。この島の人たちは、琉球列島における地域的な言語をウチナーグチ（沖縄口）とよび、標準語のことをヤマトグチ（大和口）とよんでいる。そのほかに、もうひとつ、ウチナーヤマトグチ（沖縄的な大和口）とよぶ、ウチナーグチとヤマトグチをつないでいる地域的な言語がある。ウチナーグチとよばれる地域的な言語は、標準語がはいってくる前に、琉球列島にすむ人々のあいだで日常生活のことばとして使用されてきたもので、ふつつ琉球方言といえ、こちらをさす。ウチナーヤマトグチとよばれる地域的な言語は、標準語教育が導入されたあと、標準語化の過程のなかでうまれ、標準語が普及するにともなってすこしずつ標準語にちかづいている言語である。現在、この島でそだった、おおくの人たちが日常会話で使用しているのは、どちらかといえ、いくら方言的な要素のまじったウチナーヤマトグチである。

沖縄に標準語教育が導入されたのは1880年（明治13）である。それから120年ほどたった。都市部をのぞく地域では、1960年代まで、家庭ではウチナーグチ、学校では標準語というように、両者をつかっている人がおおかった。東京オリンピックを契機に各家庭に普及したテレビ、本土復帰後の生活圏のひろがり、1980年代後半からさかんになった受験教育などによって青少年の言語生活がおおきくかわった。1990年代にはいると、方言をはなす大学生・高校生が急激にへった。本土復帰後の1972年以降にうまれた若者たちである。現在、若者たちのおおくは、まったくウチナーグチが理解できない。祖父母と父母たちが

ウチナーグチで会話をかわしている場にくわした時、会話の内容が理解できず、コミュニケーションがとれないという、高校生や大学生がおおい。ウチナーグチしかはなせない祖父母をもっている高校生や大学生は、父母に通訳してもらって意思の疎通をはかっているともいう。といっても、若者のあいだからウチナーグチがまったくなくなったわけではない。なかにはウチナーグチをある程度きくことができるという学生たちもいる。また祖父母がわかい世代にウチナーグチではなしかけている家庭やウチナーグチで日常会話をやりとりしている職場があつて、そういう環境にいる、少数の若者たちはウチナーグチをはなせる。しかしその若者たちのはなすウチナーグチは変容していて、祖父母の世代の人々はくずれた方言という。

ウチナーグチのみをこの島々の方言とすれば、方言が理解できるわかい世代の数はごくわずかだといえよう。しかし、方言的な色彩の濃淡は別にして、ウチナーヤマトグチをあたらしい方言として位置づけるとすれば、大多数の若者が方言をはなすということになるだろう。いまは、ウチナーグチとウチナーヤマトグチとのいれかわりの時期とみていいだろう。

戦前の標準語教育をうけた、ウチナーグチも標準語もはなせる世代の人たち(本土復帰後世代の人たちの祖父母)は、ウチナーグチをはなす若者が急激にへってきた状況を沖縄文化の喪失につながるととらえている。地元の新聞には沖縄の文化をたやさないために方言をのこしたいとねがう人たちのかいた、方言の見直し、いくつかの地域でおこなわれている、小学生の方言によるお話大会の継続、学校の教科目としておしえてほしいという希望、そのほか方言に関する投書が目につくようになった。また方言教室をひらいているという地域や郷土学習で方言をとりあげている小学校もある。

2. 方言・方言文学の教育実践

日本での標準語教育は、方言を一方向的に抑圧する方法でおこなわれ、文部省の言語政策は、ひろい視野で標準語も地方語もとりあげて日本語をおしえるというものではなかった。

ところが沖縄と東北の秋田・山形には学校の授業で方言を教材としてあつか

た実践例がある。これらの地域は、戦後も標準語教育がつづけられたという点で共通している。しかし、東北地方の例が小学校で方言をおしえた教師個人の実践であるのに対して、沖縄の例は、琉球方言の文学作品の指導を、教職員組合という組織でとりくんだ高等学校の実践である。この点で両者は異なっている。沖縄のような実践例は、日本の学校教育では希有のこととっていいだろう。

1960年代から1980年代前半は、沖縄の教職員労組の教育研究活動が活発な時期であった。その頃、高校では、検定教科書教材の検討がおこなわれ、そのなかで不適切な教材のえらびだしとそれにかわる自主教材のえらびだしが実践をとおしておこなわれた。現代国語と古典の授業に耐え得る、現代の詩歌や散文、それに琉球方言の詩歌が自主教材として選択され、そのうち琉球方言の文学作品は、沖縄県高等学校教職員組合編『高校生のための古典副読本 沖縄の文学』(1970)という、一冊の教科書にまとめられた。沖縄の古典の学習は、文学、なかでも琉歌と戯曲組踊り『執心鐘入り』が中心であった。とくに『執心鐘入り』の学習は、沖縄県高教組が文化運動のひとつとしてとりくんだ、教師集団による組踊りの学校公演のたすけをかりてすすめられた。同教組は、『執心鐘入り』の学習について、1981年現在、沖縄県中南部では、「高校の三分の一は定着、三分の一は軌道にのりつつあり、あとの三分の一は位置付けられていない」と報告している(『公演の記録 組踊』1981 沖縄県高教組)。その当時、琉球方言の学習はとりたてておこなわれず、作品の理解をたすける程度の説明にとどまっていた。大学で琉球方言をまなんだことのない教師たちは、琉球方言を学習するテキストや『沖縄の文学』の教師用指導書のない状況のなかで、教材研究をし、授業をした。この古典副読本は、今日の研究水準からみれば、おおくの欠点をかかえている。それにもかかわらず、沖縄県中南部の三分の二の高校で授業ができたのは、高校生のほとんどが方言を所有していたということと、組踊りの舞台鑑賞を授業のなかにとりいれながら作品をおしえることができたということがあったからである。このような状況のもとで、高校生たちは、学園祭で、自らの力で方言劇を演ずるまでになっていた。

3. 若者の琉球方言使用激減の要因

沖縄県教組は、教材の自主編成運動と実践活動をふまえて、1974年（昭和49）に、郷土の伝統的文化を教育課程に位置付けるよう、沖縄県教育庁に要請している。おくれで1977年（昭和52）には、文部省が学校教育のカリキュラムのなかに郷土教材をとり入れることをみとめ、また1922年（平成4）には、国語審議会が、これまで差別されてきた方言を見直して、「文化のシンボル」として「その豊かな表現形式は残さるべきだ」という、委員の一致した意見を報告している。ところが沖縄では1980年代後半から琉球の方言・文学の教育が下火になり、琉球方言のはなせない学生・生徒がふえていった。1980年代後半から1990年代は、全国でいちばん学力のひくい沖縄県が、そこからぬけだすため、大学進学のための県立高校を新設し、それを契機に、受験体制ができあがった時期である。大学入試にうかる生徒をそだてるのが教育の目標になり、しだいに受験教育が低年齢化した受験体制のなかで、沖縄の教師たちは沖縄の文学の授業をすることが困難になってきた。沖縄の文化のみなおし、伝統芸能がさかんになる状況のなかで、沖縄県では琉球方言がはなせない学生・生徒が急速にふえるという現象がおこったのである。

戦前から戦後、そして本土復帰後にかけて、標準語励行というかたちですすめられた標準語教育体制のもとで、頑固にいきのこった琉球方言が、1990年代になって、急速にきえはじめたのはなぜだろうか。それにはいくつかの要因があるだろう。

1960年代後半のテレビの普及と1970年代の経済の高度成長の波によって、沖縄の社会もおおきくかわった。本土復帰、経済の高度成長によってもたらされた、生活圏の拡大と各家庭へのテレビの普及とが、直接的に、沖縄の人々の言語生活におおきな影響をあたえたとかんがえられる。言語生活をかえた要因としてつぎのことがあげられるだろう。

(1) 生活圏の拡大による他府県の言語と接触する機会の増加

a 他府県からの観光客と沖縄県内への大学進学者が増加したこと、b 他府県人との結婚が増加したことがあげられる。

(2) テレビをなかだちにした標準語の各家庭への普及

復帰後世代は、テレビっ子といわれるほど、幼少のころからテレビに接し、しかも視聴時間が大人にくらべてながい。

(3) 核家族化にともなって方言との接触が減少

生活圏の拡大により結婚圏が拡大し、核家族化がすすんだ。県内外の異なる方言のもち主どうしの結婚は、意思疎通の方法として標準語の使用を余儀なくさせた。

(4) 家庭での会話が標準語になる

親世代の学歴がたかくなったこと（高卒以上の増加）がそれを可能にした。

(5) 受験教育体制が標準語教育体制にとってかわる

受験教育は、ウチナー芝居、方言のラジオ番組、伝統芸能、お年寄りのウチナーグチなど、方言が身近にある環境にもかかわらず、方言への無関心層をふやした。学校、受験産業における長時間の受験教育は、方言をまなぶ機会をうばい、これまでの標準語励行の教育にとってかわって、生徒たちの言語生活から方言をおい出すのにおおきな役割をはたした。

4. 学生のアンケートにみる琉球方言をまなぶ理由

沖縄大学でも方言が理解できない大学生がふえてきた。しかし琉球方言の科目や沖縄関係科目の受講希望者は、年々ふえている。学生達たちは講義に何をもとめているのだろうか。

沖縄大学で、私が担当している「琉球方言概説（現「沖縄の言語」）」は自由選択科目である。1990年以前は、受講生が所有している方言をもとに言語学入門としての授業をくみだてることができた。しかし1990年代は、方言入門、語学教育の形式でないと授業が成立しなくなった。また科目選択の理由にも変化がみられる。以前は、言語的な興味と単位取得が容易だろうというのが選択の理由だった。それに対して方言をしらない学生が急増した、ここ四、五年の選択理由は、おおきくかわってきた。

1999年度と2000年度の受講生に対して、オリエンテーションの時間に、自由記載のかたちで「なぜ沖縄の言語をまなびたいか」というアンケートをとってみた。どちらの年度もおなじ傾向をしめしている。ここでは2000年度のアンケー

トをまとめてみた。提出者は、法経学部の1年次から4年次までの学生57人で、沖縄県出身者と県外出身者とがいる。彼らのあげた理由を整理すると、つぎのようにまとめることができる（a～hのうちの、いくつかにまたがる記載があるので、数字は提出者の数と一致しない）。

- a 方言がわからないため祖父母や地域のお年寄りとのコミュニケーションがはかれず、こまっている（県内出身27人）
- b 出身地域外の人とのコミュニケーションをはかりたい
県内の他地域の方言を話す人と話が通じず、こまった（5人）
本土派遣留学先・外国派遣留学先で琉球方言についてきかれたが、説明できなくてこまった（3人）
TVの方言のCMやお年寄りの方言だけの会話を理解し、沖縄の人に近付きたい（県外出身の沖縄大学生3人と本土他大学からの派遣学生4人）
- c 沖縄の文化・歴史を学んで、県外や外国の人たちに琉球方言を紹介できるようにになりたい（7人）
- d 自分のアイデンティティーを認識したい（沖縄県出身2人、県外出身1人）
- e 大学生になって県内でも地域によって方言がちがうことを実感した。県内でも地域によって方言がちがうのはなぜだろう。方言についての知識をひろげたい（14人）
- f 市町村の自治体の窓口や介護福祉などでおとしよりと接するばあいに必要だと感じた（「自治体研修入門」の講義をきいて。2人）
- g 琉球方言をなくしたくない。琉球方言をうけつぎ、子や孫にもつたえていきたい。（9人）
- h 楽しく勉強できそうだ。（1人）

これらの理由を ①世代間のコミュニケーション ②他地域の人々との交流 ③沖縄の文化の継承と伝達 ④自己形成とのかかわり ⑤言語的な興味、という五つの問題にわけることができるだろう。

①世代間のコミュニケーションをはかりたいという理由から、わかいい世代が

祖父母の心情を理解したいという身内間のコミュニケーションのほか、老人福祉・自治体の窓口での老人との対応などの社会的な場でのコミュニケーションの必要を感じていることがわかる。②他地域の人々との交流をはかりたいという理由からは、方言に対する劣等感や差別感がうすれていることと、県内外に交流範囲をひろげる手段として方言の知識を得ようとしていることとをよみとることができる。③沖縄の文化の継承と伝達をあげたものは、①世代間のコミュニケーション、②他地域の人々との交流、⑤言語的な興味をあげた学生におおい。方言がつかわれなくなった現実を認識しているが、言語的な知識をもっていないため自分なりの考えをしめすことができないでいることがよみとれる。また沖縄の伝統芸能を理解するために必要だとする学生もいる。④自己形成とのかかわりをあげたのは、地域にとけこめなかった経験をもつ者で、方言の知識をまなぶことによって自己の存在感をたしかめようとしている。なかには、それをバネに方言で自己表現ができる仕事をめざして活動しているという者もいる。⑤言語的な興味をあげたグループは、他の方言に接してことばの問題を意識するようになり、言語に対する知識欲がわいたのが動機になっている。意識した時期は小学生のばあいもあり、大学入学時のばあいもある。

5. 教養として方言をおしえる教育的な意義

学生が選択の理由としてあげた①～⑤の問題は、「言語教育」と「文化の継承と伝達」の問題に集約されるだろう。つまり「方言教育」を「方言の世界」ととじこめてはいけないということである。文化は言語が核になっている。したがって「文化の継承と伝達」には媒介となる言語の知識が必要であり、言語の知識を得るには標準語のみならず方言の知識も必要である。さらに言語的な知識とともに言語生活に関する歴史的な知識が必要である。私たちは、方言と標準語をなかだちにして文化を自分のものにし、同時に自己を形成する。アイデンティティーが確立すれば、自分をそだてた文化をバックにして異なる地域の人々と交流し世界をひろげていくことができる。

方言は異なっても、おたがいの言語に共通性をみいだせば、連帯感が生まれる。相違点のみの認識は方言に対する偏見を生むおそれがある。そこから

しばしば自分の方言に対する優越感あるいは劣等感が生じる。それは中央と地方、経済力のある地域とそうでない地域、名の知られた地域と無名の地域などのあいだの、差別のあるところで生じやすい。そういうマイナスの側面をさけるには、標準語とおなじように、どの地方の方言も言語としておなじ価値をもつ、という言語観をそだてることがもとめられ、そのためには方言に対する、基礎的、言語学的な知識をおしえることが必要である。

方言に対する偏見をもたず、どの方言も中立的なたちばで見るためには、基礎的、言語学的な知識とともに歴史的にもものを見る眼をもたねばならない。まるで外国語のように感じる方言であっても、その音声や意味の変化の過程がわかれば、自分の方言との時間的なつながりや地理的なつながりがみえてくる。そのようなところに方言に対する偏見は生まれまいだろう。

文化・歴史を軽視した教育は、若者を「歴史的にものを考える」力のよわい人間にしてしまった。琉球方言には日本語の謎、日本人の来歴をとく鍵がかくされている。その謎をさぐるため、明治以来、国内外の言語学者が琉球方言を研究対象にしてきた。日本語の方言のなかで特別の位置をしめる、琉球方言の価値を意識することは、文化としての言語の歴史を意識することにつながり、また自分たちのことばである、方言や標準語をたいせつにすることにもつながるだろう。小学校からきちんとした言語教育をすれば、言語教育の面からも「歴史的にものを考える」人間をそだてることができるはずである。

ところで、沖縄の人々は方言撲滅運動というにがい歴史をもつが、いまでも方言（ウチナーグチ）を自分たちの文化としてたいせつにしている。ウチナーグチのラジオ番組、ウチナー芝居をはじめ街の書店にいっぱいならんでいるウチナーグチを材料にした本をみれば、そのことがよくわかる。若者は方言がはなせなくなったが、若者は若者で、若者のウチナーグチであたらしい文化をうみだしつつある。しかし、琉歌や組踊りなどの、琉球の古典文学、ウチナー芝居のことばが理解できなければ、若者のあたらしい文化は生命のみじかいものになるだろう。そうなれば、琉球の古典文学作品やウチナー芝居は専門家だけが享受するものになるだろう。さいわいにも書店にウチナーグチの本がたくさんならんでいるということは、沖縄の方言文化が庶民のものとして生きている

ことかたっているだろう。郷土の方言文化を享受するには方言に対する、基礎的、言語学的な知識がなければならない。方言がはなせなくてもその知識を手に入れることは可能である。沖縄の方言文化が庶民のものであることを保障するためにも、「言語教育」では方言に対する、基礎的、言語学的な知識をあたえなければならないだろう。

わかい学生たちはいろいろな可能性をもっている。それをせまい世界にとじこめることなく、ひろい世界にとびだせる「ひとりだちした人間」にそだてる義務が大学の教育者にはあるだろう。そういう立場にたっていえば、教養として琉球方言をおしえる教育的なねらいは、①方言に対する、基礎的、言語学的な知識をあたえること、②言語をとおして歴史を見る眼をやしなうこと、③郷土の文化を享受する素地をつくること、の三つになるだろう。